



■研究課題名：読み書きの習得に関わる認知要因と環境要因に関する研究
■研究者名、所属：猪俣朋恵（人間系客員研究員）
■研究分野：特別支援教育
■キーワード：読み書き、発達性ディスレクシア

【研究の背景・目的】読み書きは、当たり前のように、皆同じように習得されると思われがちである。しかし、読み書きの習得の程度や過程には個人差がある。その個人差を生み出す要因としては、個人の認知特性や環境要因が考えられている。知的発達の遅れはないが、文字を習得するために必要な認知能力の発達が十分でないために、通常の練習方法では文字の習得が困難である発達性ディスレクシア（発達性読み書き障害）を呈する場合もある。このような読み書きの習得に関わる要因とその貢献度は、年齢や文字の種類、言語体系などによって異なることが指摘されているものの、日本語に関する研究は十分に行われていない。日本語のひらがな、カタカナ、漢字の読み書きの習得に関わる要因を明らかにすることを通して、読み書きの学習困難の早期発見や有効な介入方法を探ることを目的に研究を進めている。

【研究の概要・成果等】これまで、幼稚園年長時から小学校入学後数年まで典型発達児 100 名以上を追跡し、読み書きの習得に関わる認知特性や環境要因について調査してきた。年長児においては、音韻認識や絵や数字をすばやく呼称する能力といった子どもの認知特性がひらがなの読みの習得に強く関わっており、読み成績に対する明らかな環境要因（読書や文字指導）の関与は認められなかった（猪俣ら、2016）。一方、縦断的分析では、認知特性の関与に加えて、幼児期の読書頻度が高いほど小学 1、2 年生時の音読速度が速い傾向が明らかとなり、読書が文字・音変換の効率性の発達、特に文字をまとまりとして処理する能力の発達に寄与する可能性が示された。以上の研究をベースとして現在は、発達性ディスレクシア児を対象に、彼らの読書習慣や、読み習得度と読書活動との関連について調査を進めている。発達性ディスレクシア児は、文字の読みが苦手であることから、読書を好まないと一般的には考えられているが、実態は少し異なるようである。詳細は、今後さらに研究を進めた後報告していきたい。

【期待される意義や波及効果等】本研究により、読み書きの習得が困難になりうる児童の早期発見の指標や有効な練習方法に関する示唆が得られると考えられる。特に、専門家による特別な指導ではなく、文字に関連した身近な活動によって読みの習得を促進しうる方法を明らかにできれば、より多くの読み書きが苦手な児童への貢献が期待される。

#### 【主な論文】

猪俣朋恵，宇野彰，酒井厚，春原則子（2016）．年長児のひらがなの読み書き習得に関わる認知能力と家庭での読み書き関連活動．音声言語医学，57(2)，208-216．